学生からの声 授業アンケート 集計結果

2019年度春学期 全学共通科目授業アンケートについて、このたび集計結果がまとまりました。
前回結果を超える回答数を得ることができ、
ご協力くださった学生、教員の皆様には深く感謝申し上げます。
今後はアンケート結果を活用したFD活動の推進に向けて、検討を進めてまいります。

回答率54.1％（前回差+6.0％）

〈対象科目総数〉246科目（実数※242）　〈回答対象者数〉19,457名　〈回答者数〉10,534名　〈回答率〉54.1％
※登録コード・科目名が異なるが、担当教員・授業時間が同一の科目を実数と数える。

◆過去3回の推移

	2017年度・春学期	2018年度・秋学期	2019年度・春学期
対象科目総数	261（実数256）	277（実数272）	246（実数242）
回答対象者数	20,560	21,562	19,457
回答者数	7,144	10,363	10,534
回答率	34.7％	48.1％	54.1％

◆回答結果（一部抜粋）　今回のアンケートより新たに追加された設問の集計結果をご紹介します。

この授業を通じて多様なものの見方や考え方が身につきましたか。

❶とてもよく身についた …… 36.8%
❷身についた …… 43.4%
❸どちらとも言えない …… 14.1%
❹あまり身につかなかった …… 3.8%
❺身につかなかった …… 1.9%

この授業で学んだことについて、他の人と意見交換をしたいという意欲が高まりましたか。

❶とても高まった …… 28.5%
❷高まった …… 34.0%
❸どちらとも言えない …… 24.6%
❹あまり高まらなかった …… 8.8%
❺高まらなかった …… 4.2%

アンケート集計結果の詳細
ご担当科目：Loyola ⇒ アンケート/各種申込 ⇒ アンケート集計結果照会
全体総括：FDホームページに掲載
http://www.fd-sophia.jp/education/survey/report.html

［今後の活動予定］

私大文系学部で国際貿易論を教えるということ
日時 10月10日（木）15:30～17:00　場所 6号館406教室　講師 早稲田大学商学部 横田 一彦 教授

Learning Spaces around the world: global trends, perspectives and challenges
日時 10月29日（火）15:30～17:00　場所 6号館201教室
講師 John Augeri（理工学部 海外招聘客員教員）

アクティブ・ラーニング実践ワークショップ（2019年度創立記念プログラムとして実施）
日時 11月1日（金）　場所 9号館地下アクティブコモンズ・図書館地下ラーニングコモンズ
講師 田村 恭久 教授（理工学部情報理工学科）、John Augeri（理工学部 海外招聘客員教員）

EMI-Share（予定）
日時 10月11日（金）　講師 渡部良典 教授（言語科学研究科）
日時 12月9日（月）　講師 池田真 教授（文学部英文学科）
日時 11月11日（月）　講師 Richard Pinner 准教授（文学部英文学科）

上智大学 SOPHIA UNIVERSITY
上智大学 学事センター（FD推進担当）
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1　TEL.03-3238-3522　FAX.03-3238-3264
http://www.fd-sophia.jp/

FD news

Faculty Development

vol.3
〈発行日〉2019年9月
〈発行者〉上智大学FD委員会

2018年度 秋学期
全学共通科目Good Practice表彰報告
全国私立大学FD連携フォーラムへの加盟
100分授業についての可能性と課題

2019年度 春学期
全学共通科目授業アンケート集計結果

上智大学 SOPHIA UNIVERSITY

FD news
Faculty Development

2018年度 秋学期 全学共通科目Good Practice表彰報告

2018年度秋学期全学共通科目Good Practiceの表彰式を、4月10日（水）にファカルティクラブで開催しました。Good Practiceとは、全学共通科目を対象とした授業アンケートで、評価が特に高かった科目担当教員を表彰する制度です。理事長、理事、学長、副学長、学部長、研究科委員長、各部局の長に加え、4月に着任した新任教職員が列席する中、大塚寿郎FD委員会委員長（学務担当副学長）による選考結果報告の後、曄道佳明学長から受賞者に表彰状と副賞が手交されました。その後、受賞者を代表して、外国語学部NEVES Mauro教授の挨拶がありました。

〈受賞科目と担当教員〉
「ウエルネスと身体」谷口 広明
「キャリアディベロップメント（スキルアップ編）」松本 久美子
「キリスト教人間学（生活の中のジェンダー）」平尾 桂子
「JAPANESE POP CULTURE」NEVES Mauro

全国私立大学FD連携フォーラムへの加盟

本学は、2019年4月より「全国私立大学FD連携フォーラム」へ加盟しました。FDの推進に向け、共通課題を抱えた大学とのネットワークを形成し、課題解決に向けて取組むことを目指します。

設立 2008年　加盟校 38大学　事務局 立命館大学

設立目的 全国の中規模以上の私立大学が連携してFDを推進することにより、日本の新しい「高等教育の質保証」標準を目指す。

活動内容
- FDに関わる取り組みや研究の共同開発・実施
- FDに関わる教材・資料・情報の提供・共有
- 全国への情報発信（ホームページの制作、広報誌の発行など）

http://www.fd-forum.org/fd-forum/

2019年度 第1回総会

〈日時〉2019年6月29日（土）13:00～17:00
〈場所〉創価大学（東京・八王子）
〈出席者〉31大学58名 理工学部情報理工学科 田村 恭久 教授

オンデマンド講義

フォーラムへの加盟により、インターネット上で視聴可能なオンデマンド講義の利用が可能となりました。学部学科や所属部署内のFD／SDの研修として、また個人的な学びとしても是非ご活用ください。

プログラムの詳細、ご利用方法については、学事センターFD推進担当までご連絡ください。

講義内容（一部抜粋）

テーマ	講師	所属（撮影時）	言語
大学教育改革とFD	川島啓二	京都産業大学	日/英
アクティブラーニングを促す教授法	中井俊樹	愛媛大学	日
発達障害のある学生の学び ―アスペルガー症候群を中心に―	荒木穂積	立命館大学	日
教職協働による大学運営	大島英穂	立命館大学	日
大学経営革新に活かすプロジェクト・マネジメント	牧野光昭	（社）日本能率協会	日

100分授業についての可能性と課題

総合グローバル学部　戸田美佳子 助教

100分授業の導入によって、増えた10分をどのように生かしたのか、また学生の反応はどうであったのか、総合グローバル学部のFD委員会での意見交換の内容をもとに、100分授業の可能性と課題について考えてみたい。まず、1年生にとっては高校から比べると2倍の授業時間となり耐えられないのではないかという心配もあったが、学生に大きな負担はなかったように感じる。演習科目は余裕ができ、議論の時間が増えたという意見が教員から複数寄せられた。講義科目においても、リアクションペーパーの記入と返答の時間を確保でき、学生へのフォローがより丁寧に行うことができるようになった。ただし、最後の10分を質問時間とした場合などは、質問がない学生が早めに教室から出て廊下で騒音を出し、他の授業の妨げになることもあり、注意を要する。教員側には授業運営に自由度が増した分、より慎重な対応が求められるだろう。

また、全体の授業時間は90分15回の計1350分から、100分14回の計1400分に増えているはずが、逆に15回分の授業内容を14回に割り振るために、授業内容を終えるのに苦労したという意見もあった。100分授業への対応は容易ではなく、課題が残されていると感じる。

FD委員会活動内容
ACTIVITY REPORT

EMI-Share

昨年度に引続き、EMI（English Medium Instruction／教授言語としての英語）をテーマにした講演会を実施。

2019.4.23 ［講師］川西諭 教授（経済学部経済学科）
Issues in our Classes
講義内での課題について

2019.5.17 ［講師］吉田研作 教授
CLIL/EMI Connecting Secondary School Language Education to University Language Education
CLIL/EMI が中等教育の外国語教育と大学の外国語教育をつなぐ

2019.6.11 ［講師］和泉伸一 教授（外国語学部英語学科）
Task-based Approach to Content Teaching: The Case of Intercultural Pragmatics
内容重視授業でのタスク活用型アプローチの勧め：異文化間語用論を例として

Why and how to use turnitin® for university courses

2019.5.29
［講師］Christopher Harwood 助教（国際教養学部国際教養学科）
Dennis Koyama 助教（国際教養学部国際教養学科）

「turnitin」のプログラムの利用方法と効果について説明がされた。冒頭には、アメリカで実施された研究によると大学院生で約4割、学部生においては約7割の学生がレポートや試験において不正行為を行ったことがあるという調査結果が紹介された。また、剽窃を発見することがゴールではなく、その後どう学生とコミュニケーションをとり、指導をするかがとても重要であると強調された。

内部質保証体制構築の推進と学修成果の可視化の考えについて

2019.8.1
［講師］江原昭博 准教授（関西学院大学 教育学部）

内部質保証の必要性、重要性、3つのポリシーを起点としたPDCAサイクルの構築、時間外学習時間についての昨今の議論、学修成果の可視化、内部質保証の確立について、説明された。なお、大学基準協会の第二期認証評価においては、受審大学の3分の1に内部質保証に何らかの問題点があることを指摘していると紹介された。学修成果については、これだという答えはなく、大学ごとの実情に沿った学修成果を見つけだす必要があると説明された。